
東方邦子狂

柊ジェイコブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方邦子狂

【Nコード】

N3296V

【作者名】

柊ジェイコブ

【あらすじ】

アメリカと坂戸市と川越市が幻想入り。

読者様の嫁、つまり東方キャラが何人か死にます。まあギャグ小説なんで割り切ってください。

セクシーパンティーなプロローグ（前書き）

邦子成分不足のプロローグ

セクシーパンティーなプロローグ

ここは『幻想郷』という名を持つ、よくある普通の弾幕STGの世界。

物語はここから始まる　　！

／／／／

ここは、みんなが大好き、私も大好き、アメリカ合衆国。そんなアメリカで、ある動きがあった。

「『セクシーパンティー作戦』、決行だ！」

アメリカ政府内でソファにぶんぞりかえりながら命令する、褐色肌の男。サングラスをかけ、ワイシャツの胸元を大きく開けており、その胸元には金色のネックレスがキラリと輝く。

彼こそ、アメリカ合衆国第49代大統領、サンダーソンである。

「イエーイ！」

その命令に應ずるは、彼の部下であるジョンストン將軍。スキンヘッドにサングラスという出で立ちに、さらに葉巻常備というとても男だ。

ところで、『セクシーパンティー作戦』とは何ぞや、と思った物も居るだろう。そんな諸君の為に『セクシーパンティー作戦』について簡潔に語ろう。

早い話、世界征服である。彼は公約として世界征服を掲げやがったのだ。

今日は軽いジョブとして、その辺にある都市に核爆弾を落とすことにしたサンダーソン大統領であった。

[illegible]

「ぐへへ……楽しみですねあ」

場所を移動し、軍事施設にやって来た2人。それにしてもこの2人、ノリノリである。

核爆弾の準備を行うジョINSTON將軍。そして準備が整うと、サ
ンダーソン大統領から発射の命令が下った。

それに従い、ジョンストン将軍が発射ボタンに手を掛ける。

「リフトオフ！」

ジョンストン將軍の聲と共に、世界に喧嘩を売る物は発射された。サンダーソン大統領はこの作戦の果てにある世界、つまりアメリカ以外の国が国としての權威を失い、アメリカにひれ伏す、まさにセクシーパンティーな世界に思いを馳せる。

「そろそろ着弾しますぜ！」

核爆弾をリーダーで追跡していたジョンストン將軍からの報告が来た。着弾まで、あと数秒。サンダーソン大統領は興奮の余り、ものの数秒で木っ端微塵になるであろう都市に向かって声を上げる。

「メイク マイ デイ！」

その瞬間、坂戸市は吹き飛んだ。坂戸市民のほとんどが生命活動を停止……死んだのだ！

／／／／

ここは、博麗神社。えらく閑散とした境内で1人掃除を行っている巫女、名を博麗霊夢という。

彼女の出で立ちもまた風変わりであった。パツと見は巫女服なのだが、その袖は形の所で完全に分離している。つまり腋を露出した格好になっているのだ。その為、彼女を知っている一部の者からは腋巫女と呼ばれているとか何とか。

もうすぐ掃除も一段落しそうだということで、霊夢は昼になったら日向ぼっこでもしようと考えた。

その時、霊夢の目の前の空間にスキマが開き、その中から1人の麗しい女性が現れた。

腰まで届く金髪に、西洋風の衣服に身を纏った彼女の名前は八雲紫。この幻想郷の創始者であり管理人の1人である。

「……何よ、また来たの？ 昨日も来たじゃない」

突然現れた紫に霊夢が動じない理由は、紫が霊夢の前に現れる時はいつもこうしているからだ。最初こそ驚きはしたもの、今ではすっかり慣れてしまった。

しかし霊夢は紫が焦っていることに気づかずにいた。

「霊夢」

彼女は焦りを隠さずに霊夢の名を呼ぶ。そこで霊夢は初めて紫の焦燥を感じることが出来た。そして紫は続ける。

「異変よ。一都市が一瞬で消えたわ」

／／／／

かくして、霊夢の日向ぼっこはお預けとなり、彼女は異変解決に向かうこととなった。

向かう先は、最強国家、アメリカ合衆国 ！

セクシーパンティーなプロローグ（後書き）

次回から邦子っぽくする予定です。

エロキュラの館にて（前書き）

サービスシーンを2つ程入れておきました。

感想、アドバイスなどがありましたらお知らせ願います。

エロキュラの館にて

紅魔館という建物がある。

まず言わせて貰うと、この館、本当に真っ赤である。壁も、床も、天井も、見渡す限り赤、赤、赤。おまけに窓が少ない所為で陽の光が余り多く入らない。故に初めてこの館を目にした物は口を揃えてこう言うだろう。

不気味、と。

さて、何故この館がこんな造りになっているのか。その理由はこの館の主にあった。

紅魔館が主の名はレミリア・スカーレット。外見こそ幼いものの、彼女は500歳の吸血鬼なのだ。

そう、吸血鬼。あの、人間の血を吸い尽くす吸血鬼。日光に弱い吸血鬼。

日光に弱い所為で紅魔館の窓の数は少なくなり、どうしようもない吸血衝動を紛らわす為に紅魔館は真っ赤になった。最も、それらには必要最低限に抑えられるだけであり、完全に消滅させることは出来ない。

そんな紅魔館には大図書館と呼ばれる、とても大きな図書館がある。管理人は紅魔館の主、レミリア・スカーレットではなく、その友人である魔法使い、パチュリー・ノーレッジ。数えるのが億劫になるくらいの本を、司書の小悪魔と共に2人だけで管理しているのだから驚きだ。

しかし近年、この大図書館はある問題を抱えていた。パチュリーとは別の、金髪の魔法使い（人間）、霧雨魔理沙が大図書館の書籍を盗んでいくのだ。本人曰わく一生借りるだけらしいのだが、ぶっちゃけ盗みと同じである。しかも1日1冊ペースで。

紅魔館に着いたぜ！ 美鈴は相変わらず居眠りしていたから余裕で中に入れたぜ。

さーで、今日は何の本を借りようかなー。……そうだ、今日はあの本を借りよう！

「パチュリー、本を借りに来たぜ！」

私は紅魔館には数少ない窓のガラスを突き破って大図書館に侵入する。

……

……

……… おかしい。

パチュリーの姿が、無い。オマケに小悪魔の姿までも。

昨日日本を借りに来た時には何もなかったのに……

「ま、いつか パチュリーがいない分、本が借り放題だぜ！」

そう結論付けて早速一冊の本に手を伸ばしたときだった。

「クツクツクツ……！」

目の前の本が喋った。

「この俺を読もうというのか……！」

笑わせる！！ 貴様のようなアバズレがこの俺を読もうなど、100万光年早いんだよ！」

何だコイツ！？ 喋ったと思ったら生意気なことばかりほざきやがって！ しかも100万光年は時間じゃなくて距離だぜ！

「誰だお前は!？」

取り敢えず訊いてみる。すると予想通りの答えが帰ってきた。

「俺の名前は『えろえろクイーン おっぱいの章』……！！ どこにでもある普通の魔導書だ！」

チツ！ やっぱり魔導書か！ 私は『プレイヤー』を借りに來ただけだつてのに、厄介な奴に會ひしちまつたぜ！

だが……私とて魔法使いだ。このクソ生意気な魔導書の中身が気にならない訳がない。しかしコイツは私に読まれるつもりなど微塵も無いようだ。

「なあ、ちょっとだけ読ませてくれないか？」

駄目元で一度頼んでみる。すると、

「100万光年早いっつてんだろ！！」

何回も言わせんなビッチがああああ
ああああああああああああああああ

ああああああああああああああああ
あああ！！」

いきなり襲いかかってきた！

「うおっ、危ねー！」

取り敢えず回避。

というか、本棚に収まったまま会話していたから分からなかったが、コイツの表紙には女が描かれていた。

その女を見て、何か釈に触った。

「何だその表紙の尻軽女は！？」

テメエの表紙ツラの方がよっぽどビッチャねーかあああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

そうシャウトして、私はミニ八卦炉に手をかける。このクソ生意
 ビッチ
 気な魔導書に魔法をぶつけるつもりだ。

その魔法とは、恋の魔法。美しく初々しい、純恋の魔法。

ファックばかりやってきてそんなコイツに純粋な恋という物を教えてやるぜ！

「マスタアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ス
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ク！」

極太のレーザーが私の前方を塵にする。これであのクソ本どころか、周りの本も塵と化したか……まあいいか。

「そこまでよ！」

すると、事の事態に気付いたのか、奥の方からパチュリーと小悪魔が現れた。というかパチュリー、居たんだな……

「あなた、何をしたか分かってるの？」

人の本を灰にして……
覚悟は出来てるのでしょうか？」

「誤解だぜ、パチユリ。」

魔導書が襲いかかってきたんだ。

それで仕方なく返り討ちに、な」

「ここまでする必要なかったんじゃない？」

「戦いに犠牲は付き物なんだぜ！」

パチユリーの問いに答えていく。それにしても私、よく言った！
戦いに犠牲は付き物なんだ！

「死ねッ！」

私が素晴らしい言葉をいったのにも関わらず、パチュリーは弾幕を張ってきた。

「うおっ、危ねー！」

右へ、左へ、後ろへ、前へ。彼方此方に移動して回避する。流石パチュリー、さっきのビッチ本とは訳が違うぜ。

だが、当たらない。

「効くかボケ」

「！！」

私も負けじと弾幕を張る。逃げ道など、あんまりない！

「ぐおっ!!」

命中。いつもの弾幕ならさほど痛くないのだが、今日の私の弾幕はいつもより殺傷能力をざっと65倍くらいにしておいた。パチュリーが一発で倒れるのも無理はない。

さて、パチュリーが動けない間に本を借りるとするぜ。

「クツクツクツ……！」

うおっ、パチュリー！？　まだ息があつたのか！　大人しく眠つていれば良かったものを……

「流石魔理沙ね。この私を一撃で沈めるなんて。

だけど、甘いわね。　小悪魔！」

「は、はい！」

呼ばれた小悪魔は、パチュリーの下へ足を運ぶ。するとパチュリーが小悪魔の耳元で何かを囁いた。

正直、嫌な予感がする。何かがある。絶対ある。そう思わずには居られなかった。

「フフフ……」

魔理沙、これであなとも終わりよ」

どうやら打ち合わせは終わったようだ。

「小悪魔！」

「はい！」

パチュリーが小悪魔の名を呼び、小悪魔がそれに答える。そして2人は見つめ合い、

「レッツ……！」

「融合……！」

ドォーン！！　と、唇を重ね合わせた。同時に、2人の体から白い光がフラッシュする。そして光の中から出て来たのは、

「魔理沙も私のことを……！」

違う！ 断じて違う！

クソッ、迂闊だった！ さっき自分でビッチ本に向けて『恋の魔法』って言ったのに！

というかクネクネすんな！ キモさに拍車が掛かってるんですけど！

「私も愛をあなたに伝えるぞ！」

ヤバイ、私の本能が叫ぶ。逃げろ、と！！

クソッ！ 本は借りれないが、命が惜しい！ 早く逃げ

[illegible]

!!

業火が私に迫り来る！
ちよ、待て！
おい！！

[illegible]

/ / / /

霧雨魔理沙は生命活動を停止……死んだのだ！

エロキュラの館にて（後書き）

サービスシーン1：パチュリーと小悪魔のキス

サービスシーン2：全裸（ただし皮膚も服にカウントされているがな！！）

という訳で魔理沙は今回の異変解決に参加出来なくなりました。
死んだから仕方ない。

でも邦子の世界と混じってるからなあ…… ゾンビとして生き返ってもおかしくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296v/>

東方邦子狂

2011年10月6日17時09分発行